

NASAより宇宙に近い町工場

植松努 著

北海道富良野に近い赤平市に従業員20人で、リサイクルに使用するパワーショベルに付ける特殊なマグネットを製造する町工場がある。しかし、この工場では、ロケットや人工衛星を製作したり、世界に3箇所しかない無重力実験施設を所有するなど宇宙開発にも取り組んでいる。

筆者の工場で作っているロケットは、北海道大学大学院の永田晴紀教授が開発した、火薬は一切使用しないポリエチレンを燃料としたもので、安全性を第一に考えている。平成19年8月には、全長5メートルの機体打ち上げに成功した。

ところで、筆者の工場の本業はマグネットの開発と製造である。この仕事に取り組んだきっかけは、リサイクル法という新しくできた法律でゴミの分別に関わったことだそうだ。ゴミの分別という作業はものすごく大変で「これはやっておれんわ」と思ったときにビジネスのチャンスがあると思ったそうである。なぜなら、大変なことや辛い事を克服したり改善したりすることが、みんな立派なビジネスになるということがわかったからで、この考えが会社経営の基盤になっているそうである。

筆者は、小さいときから工夫をすることが大好きだったという。ところが、会社を始めてみると履歴書を持ってくる人は、やる前にあきらめてしまう人、自分で考えることを嫌がる人、興味を持ってない人が大半だった。これではいけないと、誰もが工夫をして「よりよく」を目指すために大量生産・大量消費から脱却し、節約したほうが豊かな社会になるのではないかと考えた。そして、ゼロから一を生み出すという仕事をするために、やったことのないことをやりたがる人、あきらめない人、工夫する人を求め

た。その結果、自分も社会も良くしたいという人たちが集まり、宇宙開発に取り組んでいる。

筆者のものづくりの原点は紙飛行機である。小学校6年生の時、ペーパークラフトの飛行機を自分と同じくらいの大きさに作り、飛ぶように調整し、凧揚げ大会で優勝した。中学生になると、NASAがつくった実験用の翼のない飛行機（世界で初めての音速ロケット）を見て、目を奪われたそうである。そして飛行機やロケットのことを勉強しようと決意し、大学を卒業と同時に飛行機を作る会社に就職した。この会社では、次のようなことを学んだという。

- ・好きなことがない人は学ぶことができない
- ・自信のない人は「評論」をして他人の自信を奪う
- ・楽をしないで努力しよう

結果的に5年間勤めた会社をやめ、父親の経営する町工場に勤めることになった。工場の経営方針は、「稼働率を下げる。なるべく売らない。なるべくつくらない。」という変わったものである。働く時間を短くして、最低限の食いぶちは知恵を使ってさっさと稼いでしまい、余らせた時間で、未来のために違うことをやりたいからだそうだ。

燃料がポリエチレンのロケットは世界で初めてのエンジンであり、何回も失敗をしたそうである。失敗を重ねて学んだことは、「あきらめるのはいつでもできるのです。いつでもできることはいつでもできるのだから、最後にまわせばいい」ということである。

筆者が目指しているロケットは宇宙のゴミ（デブリ）を片付けるロケットだそうだ。デブリをキャッチするための技術も必要であることから人工衛星も作るようになった。組織が大きくなりすぎたNASAよりも、心意気は宇宙に近い。（ディスカヴァー・トゥエンティワン、199頁、1300円）

（長田利彦）